

崎門学報

第四号

平成 27 年 7 月 31 日

崎門学研究会



目次

- 一面 菅原道真公から屈原へ
- 四面 崎門列伝④西依成斎
- 六面 若林強斎先生①
- 『雑話筆記』を読む
- 七面 時論…
- 今夏歴史教科書採択に想う

菅原道真公から屈原へ

主君をお諫める

(以下前号の続き)

宇多醍醐両帝の親政を補佐した菅公についても一つ重要なのは、彼が天皇にお諫めることを辞さなかった事です。これは先に紹介した宇多天皇の『寛平御遺誠』で「朕選びて博士と為し、多く諫正を受く」とあることにも伺えますが、『国朝諫諍録』という書物にも、「宇多帝、一歳より殺生を禁ず。しかして次年又放鷹の遊び有り、道真従容として帝に曰く、今年鳥獸何の幸(つみ)を犯せるか。帝慙(は)じて罷む。醍醐帝しばしば神泉苑に幸(みゆき)し乾臨閣に飲宴す。道真之を諫め、帝遂に止む。」(日本教育文庫孝義編所収、読み下しは筆者)とあり、菅公が両帝の奢侈をお諫めたことが記されています。

義の為であれば相手が主君たる天皇といえどもお諫める。それは菅公が体現した拘幽操の作者である韓愈が、一方では『争臣論』を著して主君の不義を正す臣下の義務を説き、自らも主君の憲宗に『仏骨論表(仏骨を論ずるの表)』を奉じて廃仏を論じたのが

逆鱗に触れ左遷されたことと関係があるように思われます。『争臣論』の争臣とは、直言を述べて天子と論争する臣下ことです。韓愈はこの論の中で、諫議大夫の陽城が、「諫議」という名が示す通り主君を諫めるのを任務とする争臣の一人であるにもかかわらず、五年の間少しもその任務を遂行しないのは保身の為であると言って非難しています。韓愈からすれば、主君が親政を行い、名君と称されるような善政を行うためには、賢臣たちによるお諫めが不可欠なことでしょう。さもなくば、臣下は主君の独断に阿諛追従するだけのイエスマンになり、だれも悪政を正す者はいない。これではどんな親政も失敗します。しかしだからといって、お諫めの結果、下手に主君の逆鱗に触れば、韓愈のように地方に左遷されるか、最悪の場合は死に追い遣られる危険もあります。その危険を承知の上で、敢えて主君をお諫めし、それによって左遷され不遇を強いられたとしても、決して主君を怨まないどころか、かえってそうした境遇を招いた自らの不徳を恥じる、これは他でもなく崎門学が重んじる操幽操の精神そのものです。

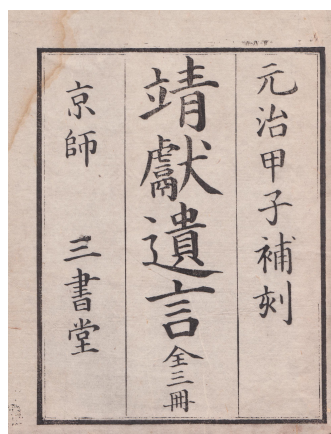
このように、崎門学は、易姓革命を否定す

るからといって主君への盲目的追従を説いているわけではありません。むしろ易姓革命を否定するがゆえに、主君の親政を補佐し、そのためとあらばお諫めをも辞さない臣下の責務を説いているのです。その上で、先に菅公が周囲の引退勧告を無視したのは、藤原氏を牽制して天皇親政を擁護するためであったと述べましたが、これはしばしば天子へのお諫めを辞さなかった事実と相まって彼の忠臣たる所以を証明するものといえましょう。

『靖献遺言』

ところで山崎闇斎先生の高弟である浅見綱斎(けいさい)は、貞享元年(一六八四年)、33歳の時に『靖献遺言』という書物を著しました。この書物は、屈平、諸葛亮、陶潜、顔真卿、文天祥、謝枋得、劉因、方孝孺等、シナにおける八人の忠臣の事績と遺言を編述したものです。書名にある「靖献」とは、『書経』微子篇において、微子、比干と併せて殷の三仁の一人とされる箕子が微子に言ったとされる「みずからや靖んじみずから先王に献ず」(人々のおのみずから靖んじて己の志す道を進み、それぞれその身命を捧げて先王に報いるべきである、の意)の語に由来します(近藤啓吾先生『靖献遺言講義』)。綱斎先生は、上述した八人を「靖献」の生き方を貫いた国家の忠臣と認め、彼等の「遺言」と呼ぶに相応しい文章を掲げることで、「正統」と「中国」をめぐる二つのテーマ、すなわち「君臣

の分」と「内外の別」の大義を闡明しようとしたのでした。先生が、我が国の忠臣ではなく、お隣シナの忠臣をとり上げたのには訳があります。というのも、『靖献遺言』が追求した「君臣の義」と「内外の別」は、自ずから皇室中心主義に行き着き、それは表では朝廷を敬いながら、裏ではこれを遠ざけ、外には中華思想にかぶれながら内には大権を篡奪した徳川幕府への批判につながります。よって上述した菅公等を持ち出して、天皇親政の実を挙げた人物の功績をそのまま称揚すれば、当時全盛であった幕府の怒りを買って弾圧されるのは火を見るよりも明らかです。そこで、綱斎は敢えて我が国ではなくシナの忠臣をとり上げることによって、彼等に自らの思いを仮託し、婉曲に幕府政治を批判したのでした。事実、こうした性格を持つ本書は、幕末の志士たちの間で尊皇攘夷運動のバイブルとされ、広く読み継がれました。なかでも越前の橋本左内などは、常時懷に同書を忍ばせていたといわれます。左内は同じく越前の儒者である吉田東篁から崎門学を受け継いだ



靖献遺言

のでした。このように『靖献遺言』がシナ忠臣をとり上げたからといって、他の儒者の様な単なるシナかぶれではなかったことは、同書のなかでこれらの忠臣を全て敬称を意味する字(あざな)ではなく、例えば「屈原」を「屈平」と云うように本名で記していることから伺えます。かつて筆者が近藤啓吾先生に崎門学の勉強法を尋ねたとき、先生は他の書物はいいからこの『靖献遺言』を熟読しなさいと仰っていました。それ位に本書は崎門学の中で重要な文献だという事でしよう。

浅見綱斎先生

そこで以下では本書の内容を見ていこうと思います。その前に作者の浅見綱斎先生の略伝を紹介します。浅見綱斎先生は、承應元年(一六五二年)、京都で医業を営む父、道斎の次男として生まれました。かねてより軍学や儒学の研鑽を積んでおりましたが、延寶四、五年、先生25、26歳の時に山崎闇斎先生の門に入り、主として儒学、ことに朱子学の厳格な教理に開眼して自己を鍛錬いたしました



浅見綱斎先生

た。その結果、佐藤直方と三宅尚斎を併せた「崎門の三傑」の一人として闇斎学派の儒学的側面である崎門学派を継承するに至ります。

綱斎先生には『靖献遺言』の他にも『忠孝類説』や『拘幽操附録』、『喪葬小記』など沢山の著作がありますが、文章上のみならず、行動の上においても「誓って関東の土を踏まず」といって御所のまします京都を離れず、諸侯にも仕えず清貧に甘んじることによって、皇室中心主義者たる自己の信念を貫き通しました。しかしその間、先生を慕って参集した弟子の指導育成にも力を入れています。その舞台になった「錦陌講堂」は綱斎先生が御所の近くに開いた私塾であり、峻厳な学風で知られましたが、若林強斎を始めとする多くの優秀な門人を輩出しました。その後、綱斎先生は正徳元年(一七二二年)、60歳にして亡くなりましたが、子息がなかったため血統は断絶、「錦陌講堂」は廃止されました。

しかしそれによって一旦離散した門人たちの期待が集まった若林強斎は先生と同じ京都に敬慕する楠公(楠正成)の名に由来した私塾、「望桶軒」を開講し、闇斎、綱斎の両先生に連なる崎門の正統を継承いたします。

余談ながら、綱斎先生には実子が無かったにもかかわらず養子を取らず、それは師の闇斎先生も同じでした。この背景には養子を不可とする崎門の家族的道義観がありました。す

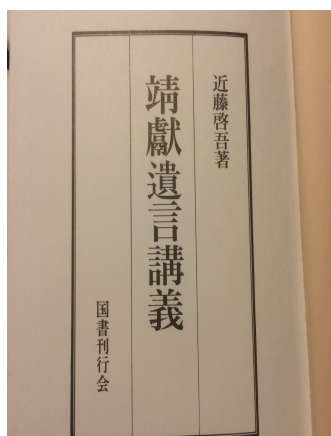
なわち、「純理論より立脚すれば、子に二父あるべからざるは、臣に二君あるべからず」と同一である。我が肉体の親を捨て、他人を親として之を敬愛するは、私の生まれたる本国を去って他国を崇拜すると同一である」(平泉澄先生編『闇斎先生と日本精神』所収、内田周平先生「崎門尊王論の発達」という訳です。かくして先生の血統は絶えましたが、学統は続きました。

『靖献遺言』を読む

それではこれから『靖献遺言』(以下『遺言』と略称)の中身を観て行きますが、そのために筆者は現在における崎門学の第一人者である近藤啓吾先生が著された『靖献遺言講義』を主たるテキストとし、さらに『遺言』の著者である浅見綱斎先生自身が『遺言』について講義した『靖献遺言講義』(国民道德叢書)と『靖献遺言師説』、綱斎門下の若林強斎先生による『靖献遺言講義』を参照し、以下ではこれらを『講義』ないしは『師説』と略称することを予めお断りいたします。ちなみに上述した綱斎先生『師説』と強斎先生『講義』は、近藤先生の書庫である拾穂書屋所蔵のものを先生から頂戴いたしました。

まず綱斎先生は『遺言』の序において本書執筆の動機を次のように記しています。すなわち、古今に聖賢と称される人物の書は沢山あるのに敢えて自分が本書を編んだのは、世の中の道義が廃れ聖賢の教えを知ってもそれ

を実践する者は少ないからである。まだ親子は天性の恩愛で結び付いているから賊害の罪を犯す者は少ないが、君臣の関係ともなると、一見貴賤上下の秩序が保たれているようでも、いざ国家の動乱転覆に際して臣下が日頃の恩義に背いて主君を捨て去り、敵方に奔走することがあるのは、学問によって君臣の義を錬磨していないからである。そこで本書ではこの大義を明らかにした八人を選択した。それは抽象的な忠孝を説くのではなく、具体的な人物の事歴を挙げたほうが読み手に感動を与えやすいからである。そして彼等の遺言を掲げたのは、辞世の言にこそ、その人物の肺肝から出た心志が現れるからである。その上で綱斎先生は曰く、「大抵吾国近世の士たる者、率(おおむ)ね学を好まず、偶偶(たまたま)学をする者は記誦詞章の資とするに過ぎずして英気志義ある者は、視て以為へり、学問読書は事に益なしとして之を笑い訕(そし)る、殊(たえ)て知らず、学ばざれば大義を弁ふる事能はず、かの英気志義も用ふる所を知らず、但この学を唱ふる者の誤よりし



近藤啓吾先生『講義』

て此弊に至らしむるなり」と。そこで本書は大義の端緒を明らかにし、君国の大事に処して身を誤らぬようにするのが目的であると述べられています。この様に本書は飽くまで実践を目的とし、その為の手段として具体的な忠臣義士の事績を通して義を明らかにしております。こうした性格を持つ本書が尊皇の実践家たる勤皇の志士たちに愛読されたのはむしろ当然と言えましょう。

屈原



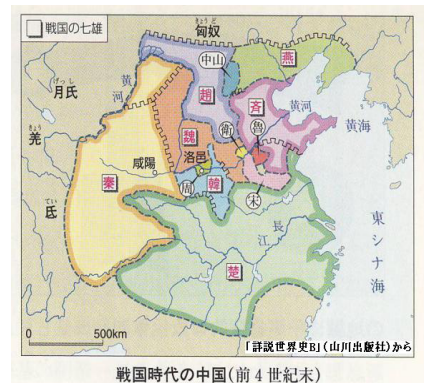
屈原

『遺言』の第一巻は楚の屈原から始まります。屈原の原は字（あざな）であり本名は平です。上述のように綱齋先生は、敢て本書の登場人物を敬称を意味する字ではなく本名で呼んで読んでおりますので、ここでもそれに従います。屈原は春秋時代、六国の一つである楚の王族に生まれ懷王に仕えました。いわばエリートの出身です。彼は王族の賢良なる人材を統率し、宮廷の中では懷王と国政を評決し、また宮廷の外では群臣を監察して諸外国との交渉にあたるなど優れた手腕を発揮し

懷王の信任を得ました。しかし屈原の能力を妬んだ同僚の上官大夫は、懷王に屈原が自らの功を誇っていると讒言したため、怒った懷王は平を疎んじるようになりました。屈原は煩悶のなかで『離騷』を作り、古代の聖王や暴君の教訓を記すことで、懷王を覚醒させ正道に戻そうとしましたが叶いませんでした。当時楚の西にある大国秦は、東方の斉を伐とうとしていましたが、斉は楚と同盟して秦に対抗する連衡策をとっていました。そこで秦

は張儀を楚に遣わし、懷王に領土をやると言って斉との関係を絶たせたのでした。しかし秦は約束の領土を楚にあげなかったため、怒った懷王は秦を攻めましたがかえって秦に漢中の地を奪われ、さらに隣国の韓や魏に攻められて苦境に陥りました。後に秦は楚に講和を申し入れ、漢中を返すと言って来ましたが、懷王は土地の返還よりも張儀の処断を求めました。すると張儀は再び楚を訪れて懷王の重臣に賄賂を贈り寵姫を言いくるめるなどしたため、懷王は張儀を釈放してしまします。

これを聞いた屈原は、使っていた斉から帰国して懷王に「どうして張儀を殺さなかったのか」と言って諫め、王も悔いて張儀を追いましたが間に合いませんでした。さらにその後また秦は懷王を欺いて楚秦の間にある武関での会見を申し入れて来たのに対して、屈原は懷王に「行つてはなりません」とお諫めしましたが、懷王は子の子蘭の勧めによって武関に赴き、案の定秦に捕らえられて咸陽(秦



戦国時代のシナの地図

の都、後々の長安)に拉致され、そのまま客死しました。これによって楚では懷王の子である襄王が即位し、子蘭を令尹、現在の総理大臣に任じましたが、前述の通り屈原はかねてより子蘭を好まず、これを知った子蘭の讒言によって江南に左遷されました。事此処に至り、平は『九章』や『漁父』などの諸編を作り、己の志をのべて君心を悟らせようとしてきましたが、結局省みられませんでした。しかし祖国が衰滅するのを見るに忍びず、ついに石を懷に抱き、汨羅という川に身を投げて死にました。

そんな屈原の遺言として綱齋が『遺言』に掲げたのは『離騷』と『懷沙』の賦です。『離騷』は屈原が讒言に疎んじられた時の憂愁の心境を述べた長編詩であり、その字義は「躁(騒動)に遭ふの義」です(綱齋「講義」)。また『懷沙』は前述した『九章』のうちの一篇であり、屈原が汨羅に身を投げる最後の心境を詠んでいます。このように『離騷』と『懷沙』

はそれぞれ別の作品ですが『離騷』を『懷沙』の上に題した理由について綱齋先生は『屈原の屈原たるは、この二字より発せるを以ての故に、挙げて以て全編の主意要旨となす。『懷沙』は特に其の究意なり』と述べています(『講義』)。

朱子は屈原の人物について「その志行或ひは中庸に過ぎて以て法となすべからずと雖も、然れども皆、君に忠し国を愛するの誠心に出づ。原の書たる、その辞旨・・・皆、みづから己む能はざる縉纒惻怛(けんけんそくだつ)の至意に生る」と述べています。ここでいう「縉纒惻怛」の縉纒とは民がその君を忘れようとしても忘れられないことで、惻怛はいたみかなしむことであり、強齋先生は「コ、ガ靖猷ノ旨、遺言一部ノ眼目トイフハコ、ゾ」と述べています。強齋先生によると、先に屈原が『離騷』を作って懷王を諫めたのもこの「縉纒惻怛」の心によるものであり、自分が王に疎んじられたからといって「モウ爵録ニ望ミハナイ、跡ノコトハ知ラヌトイウテ、君ヲ顧ミヌハ忠デハナイ。コ、ガ忠臣ノ情ノヤムニヤマレヌ、縉纒惻怛ノ心ナリニ、カウイフタラ人ガ笑フカノ、サモシガラフカノトイフ様ナ計較ノ意ハナイ。只君ヲ愛シ国ヲ憂フル心ガヤマヌニヨツテ、自然ニカウアルゾ」(『講義』)と述べています。この「縉纒惻怛」の語こそ、『拘幽操』で文王が紂王の暴虐にかかわらず、君が愛しくてならない心を表す言葉にほかならず、かくして屈原

が懷王を想う心は、文王が紂王を想う心と相通じております。

さらに朱子は、漢末の揚雄という人物が書いた『反離騷』に序文を加え、揚雄が屈原の文才を惜しんでその死を悼み、『離騷』の文を拾って上述の『反離騷』を作りながら、後に漢から天下を篡奪した王莽に媚びて節義を失ったことを批判し、同じく詩文に秀でた揚雄と屈原がその本質において似て非なることを明らかにしています。これに対して同じく漢末の龔勝という人物は、王莽が爵禄と威嚇で仕官を強要したのを拒絶し、漢累代の恩を受けながら逆臣である莽に仕えることは出来ないと云って絶食死しました。『遺言』はこの勝を、周の武王が殷の紂王を放伐したのを非難し、周の粟を食はずとして首陽山にこもって餓死した伯夷と叔斉になぞらえています。

このように綱齋先生が『遺言』のなかで屈原を讀えているのは、その詩文の才ではなく主君を愛おしく想う至純の精神です。しかし、近藤先生の『講義』によると、シナにおける屈原評は長い間、自国のことのみに拘泥した狭量の人物、または退いて保身することを知らぬ固陋の人物、甚だしきは、己の才能に誇り君の過失を暴き立てた傲慢の人物といったもので、屈原をその至純の精神において理解し得たのは柳宗元からであると言っておられます。また我が国においても、屈原の存在は平安時代から知られておりましたが、彼を憂

国忠貞の人物として尊重したのは林羅山が最初であり、その精神の深奥を評価したのは綱齋先生だそうです（近藤先生『講義』序説）。近藤先生は『講義』の序説で高杉晋作が野山獄で詠んだ次の詩を掲げておられます。

君見ずや死して忠鬼となる菅相公
靈魂なほ在り天拝の峰
又見ずや石を懷きて流に投ず楚の屈平
今に至るまで人は悲しむ汨羅の江
古より讒間、忠節を害す
忠臣君を思いて躬を懷はず
われまた貶謫幽囚の士
二公を憶起して涙、胸を潤す
恨むをやめよ空しく讒間のために死するを
おのづから後世、議論の公なるあり

菅相公とは菅原道真公の事であり、高杉は自らを屈平や菅公になぞらえ、その不遇を慰めているのです。言うまでもなく、高杉は吉田松陰の弟子であり、その松陰もまた野山獄で『遺言』を読んだことが知られていますから、綱齋の学、崎門の精神は松陰を通じて高杉に流入したと言えます。

（続く）

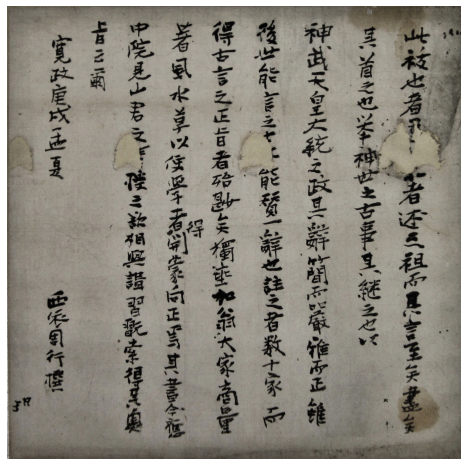
崎門列伝④西依成斎 坪内隆彦

●望楠軒維持に捧げられた人生

前回取り上げた若林強斎は、師浅見綱齋が歿した正徳元（一七一二）年から、その後を継いで子弟の指導に当たっていたが、享保八（一七二三）年頃、楠公に「仮りにも君を怨み奉るの心発らば、天照大神の名をば唱ふべし」の言葉あることに感動し、塾を「望楠軒」と名づけた。

この望楠軒を死守し、闇斎―綱齋―強斎と継がれた崎門学を広げる上で功績があつたのが、西依成斎である。まず、近藤啓吾先生の「西依成斎の学勲」にしたがつて、成斎の歩んだ人生を見ていきたい。

成斎は元禄十五（一七〇二）閏八月十二日、西依三郎右衛門の第二子として肥後に生



西依成斎先生の書

れた。養父前原文軒が綱齋に従学していた縁からであろうか、成斎は二十一歳のときに、京師に遊学し、強斎に入門する。三年間、強斎の指導を受け一旦帰国したが、享保十一（一七二六）年に再び上京し、三年間指導を受けている。

望楠軒は強斎の高弟で女婿でもあつた小野鶴山が継承していたが、寛保三（一七四三）年、小浜藩に聘せられて京を去つたため、鶴山に代わって成斎が講主となった。その後、成斎は宝暦三（一七五三）年あるいはその翌年頃、一旦、兄長雄の子・景翼（墨山）に望楠軒を譲つた。ところが、墨山は明和七（一七七〇）年、小浜藩に聘せられ、同年五月に藩校順造館教授に就いた。さらに同年六月には鶴山が亡くなったため、成斎が望楠軒を守ることになった。

ところが、成斎を悲劇が襲う。天明八（一七八八）年二月、京都に大火があり、望楠軒が類焼してしまつたのだ。しかし、八十七歳という高齢にもかかわらず成斎は屈しなかつた。焼け跡に一小室を作つてそこに留まり続けた。『処士西依先生行状』は、次のように記している。

「一日、先生、温（行状の撰者・鈴木潤齋）の草舎に臨みたまふ。たまたま篤之（奥野寧斎）側にあり、請うていはく、灰燼の余、烈日厳冬当りやすからず。況んや眊期を以て破屋単扇の間に俯仰せらるるをや。一旦、霜露の感、たとひみづから軽んぜらるるも、子弟

の責をいかんせん、と。先生肯んぜずしていはく、先師の主、庫裏ぐりにあるおり、老夫いづくんぞ避けん、と」

つまり、先師である綱斎の神位がこの場所にある以上は、そこを立ち去ることはできないというのである。成斎は焼け跡に留まり、小浜から駆けつけた墨山の協力を得て、直ちに望桶軒再建に着手したのである。墨山が帰国した後も、成斎は自ら工事を監督、ついに寛政元（一七八九）年に再建にこぎつけた。以来寛政九（一七九七）年間七月四日、九十六歳で亡くなるまで、彼は望桶軒維持に人生を捧げたのである。

成斎が生涯を賭した望桶軒維持の努力は、成斎死後も代々西依家に受け継がれ、綱斎・強斎の祭祀も、同家によって続けられていった。

成斎は望桶軒を守りぬくのみならず、秋田、隠岐、土佐、美濃など各地の崎門学派の教育に尽くした。

例えば、秋田藩では、梅津共軒が正徳二（一七二二）年に上京して、綱斎門下の山本復斎に学び、同四年には強斎にも入門していた。そして、秋田藩角間川（大曲市）の落合東堤の『東堤隨筆』に「昔、梅津家二青木雲岫ト云老人アリ、コレハ宮地多左衛門ノ取立ニテ学問シタル人ニテ、五十三ニナル時、隠居シテ京師へ出テ西依成斎ノ門人ト成テ易ヲ伝ヘラレタ」とあるように、成斎の時代にも、梅津家と望桶軒の関係は維持されていた。

隠岐もまた、幕末に中沼秋水・葵園の兄弟が成斎門下の鈴木潤斎の子・遺音に従学したように、望桶軒と深い関係を維持していた。

隠岐の億岐幸生おきさちなりが安永・天明の頃に上京して成斎に従うなど、隠岐と望桶軒の関係の基盤を作ったのが成斎だった。

土佐においては、谷秦山の門人・宮地静軒（介直）の子・宮地喜八郎が宝暦四年に成斎に入門、同八年までその教を受けていた。宮地以外にも、戸部愿山・箕浦立斎・岡鳳溟等が成斎に従学していた。また、美濃においても、強斎によって指導された学徒の子孫たちが、成斎の時代にも望桶軒と深い関係を維持していた。

近藤先生は、「成斎は、門下を教へて倦まず、同時に各地に散在する同学の学徒と連絡して懇切にこれらとを遇し、離脱することなからしめた。望桶の学は、この時、この人によつてよく維持せられ得たのである」と書かれている。成斎の学門は、崎門学派の枠を超え、より広範な層に影響を与えていた。安永（一七七二～一七八〇年）、天明（一七八一～一七八九年）の時代になると、古学に対する反省から、道義の究明とその実践を学問の眼目とすべきとの気運が起ったからである。近藤先生は、次のように指摘されている。

「古学に慊あやたらず、道義を求め紀綱を樹立せんと志す学徒は、必ず成斎を頼りとした。しかもやがて、柴野栗山・古賀精里・尾藤二洲等の俊秀が相ついで門下に入出入するやうにな

り、ついでこれ等の人物が松平定信に登用せられて学政改革に参ずるやうになると、成斎の学問は間接ながら昌平黌に影響を与へるこゝとなつた」

さらに、成斎の学問は石田梅岩を開祖とする石門心学にも影響を与えていたと考えられる。例えば、丹波八上の大庄屋に生れた波部先貞は、梅岩門下の手島堵庵に学んで心学を修める一方、成斎にも学んでいた。近藤先生は「鳥辺山の綱斎の墓所の周辺には、石田梅岩・手島堵庵・中沢道二等の心学者の墓が数多く存するが、その墓制がすべて綱斎の定めるところに従つてゐることは、成斎を通じて崎門、殊に綱斎の学問が心学に流入してゐることを推察せしめる」と指摘されている。

●「自天祐之」の悲願

何より注目すべきは、成斎が王政復古の実現を夢見て、公卿にご進講申し上げていたことである。右大臣二条宗基に対する成斎の進講の思いは『処士西依先生行状』に示されている。

「二条右府藤公、青年より学に志す。先生の名行の美を聞き、これを聘して業を受け、待つに師礼を以てし、恩遇甚だ渥し。嘗て語りていはく、古へは四姓に各々庶黌しんしん（学ぶ所）ありしに、後世皆廢れ、縉紳しんしんの学、地を掃ふ。寡人願はくは其の端をなさん、と。是に於いて寢殿を某地に遷し、以て学黌を創立し、先生をして教授となし、士大夫をして矜式する

所あらしめんと欲し、先生も亦た斯文の頼るある喜び、遂に景翼をして望桶軒に在りて業を諸生に授けしめ、みづからは正親町大門の西に寓居す」

ところが、二修宗基が薨去したことによつて、学舎の創設も成らず、成斎もその志を緒紳家の子弟に浸透させていくことができなかった。成斎の無念は次の言葉に示されている。

「アナタガ今ニ御存生ナラバ、朝家ノコトモナニカモ改革セラル、コトアルベシ。惜シキコトハ御早世ニテ、シカモ末ダ御当職ニモナラセラレズ薨去ナリシコト也。毎々御雑話ニ、我等当職ニナリナバ、コレヲノコトハカフ改メフナドト御噂アリシ也」

成斎はまた同時期、九条尚実なおざねにもご進講申し上げていた。さらに、安永年間（一七七二～一七八〇年）には中院通維（見山）にご進講申し上げる機会を得た。道維は元文三（一七三八）年に久我通兄の二男として生れ、中院通枝の養子となった。宝暦八（一七五八）年、宝暦事件として知られる竹内式部の事件に連座して永敷居を命ぜられ、同十年に落飾して以降、見山と号し、安永七（一七七八）年六月、四十一歳にして勅免された。見山は、赦免されるや、式部と深い関係にあった成斎に進講を請うたと推測される。

ここで想起すべきは、その晩年に尊号問題をめぐつて奔走した末、自決に追い込まれた高山彦九郎と成斎との関係である。彦九郎は

伊勢崎で村土玉水、浦野知周（神村）らと交友する中で崎門学に傾倒していったが、すでに天明二（一七八二）年に成斎を訪れている。

そして、尊号問題で奔走した時期にも、成斎やその門人たちと接触していた。

寛政五年の彦九郎の自決は、成斎の心を強く揺さぶったと推測される。この年の成斎の書に「月色江聲共一樓」がある。これは、晩唐の詩人雍陶の七言絶句の末句で、近藤先生は、凄愴の思いをこの一句に託したものと言うほかないと書かれている。そして、翌寛政六年の成斎の書に「自天祐之」（天よりこれを祐く）がある。近藤先生は、「天祐を受くべき天子の出現を願つての熱祷の意を込めて筆を執つたものであることが察せられる」と述べられている。

その三年後の寛政八年七月、桑名藩の儒官・廣瀬蒙斎が西遊の途上、望楠軒に成斎を訪ねた。蒙斎の紀行『有方録』には次のようにある。

「二十七日、西依成斎に謁す。年方に九十五、なお矍鑠たり。喜んで人に対して古今の得失を談ず。（中略）梁上に眉尖刀、重さ数十斤のものを横たえ、毎に曰く、万一に事あらは、我れ此の刀を擁して、以て禁闈（宮中）を護衛せんと欲す。万夫と雖ども、必ず辟易して進まざらんと。大概老いてなお壮なり」

老いてもなお、皇統守護を体現せんとする志。闇斎以来の崎門正統派にふさわしい晩年であった。

若林強斎先生

『雑話筆記』を読む①

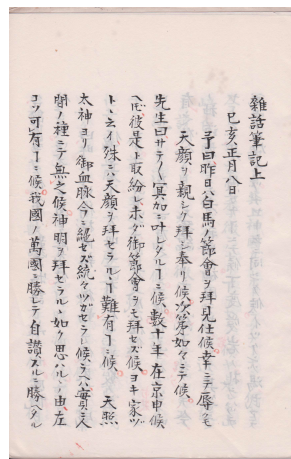
『雑話筆記』は若林強斎先生の門人である山口春水が強斎先生より聞いた平生の諸話を筆録したものです。若林強斎先生は浅見綱斎先生晩年の門人であり、綱斎先生が没する正徳元年までの十年間従学しました。晩年の綱斎先生は、かつて神道に傾斜する闇斎先生を批判したことを懺悔し、自らも神道に開眼しましたが、結局は儒学の合理主義を脱し切れず、神道の蘊奥に達することは出来ませんでした。これに対して強斎先生もまた神道に傾斜し、上述した山口春水の紹介で祇園社社司の山本主馬から神道の伝を受けます。主馬は玉本草斎より神道の伝を受け、さらに草斎は山崎闇斎先生の神道の継承者である正親町公通卿の門人でありますから、かくして強斎先生は山本主馬の神道伝を通じて、闇斎先生の唱えた垂加神道の正統を継ぐことになりました。無論、闇斎先生の朱子学における継承者は綱斎先生ですから、一度神儒に分裂した闇斎学は、若林強斎先生によって再統一された



若林強斎先生

とも言えます。強斎先生は京都で「望楠軒」という名の私塾を開き、多くの門人を育成しました。上述した山口春水もその一人です。よってその春水の記した『雑話筆記』は強斎先生の思想と人物を知る上で極めて重要な資料であり、かつて近藤先生も小生等がこの『雑話筆記』を崎門学の必読文献として挙げられたのでした。

そこで小生は坪内兄と平成25年7月から本書の輪読を開始し、暫しの中断を挟みながらも本年1月によりやく読了致しました。テキストとしては、近藤先生が編纂された『神道体系論説編・垂加神道（下）』所収のものを使用しました。上述のごとく読了に時間がかかったのは、本書における独特な言葉遣いに加え、風水や易学の用語のために読解に苦戦を強いられたからです。したがって本書を読了したとは申しませんが、殊小生に関する限りその理解は甚だ心許ありません。そこで本稿では、『雑話筆記』を読む」と題して小生なりの読解の成果を発表し、以って諸賢のご批判を仰ぎたいと思います。なお、本稿で『雑話筆記』の本文を引用するに際しては、原文



雑話筆記

の片仮名（「などの合略字や、などの踊り字を含む」）を平仮名にし、漢字の旧字体も新字体に改めました。また漢文は読み下しました。これらは原文の忠実なる引用を重視する先学のお叱りを覚悟しての事です、読者の用に供するため、今日においてはそれが適当と判断しました。

まず、本書は巻頭に山口春水の序文を掲げ、この記録には強斎先生から口外無用と言われた箇条もあるが、そのなかには先生の思召しを伺うべきこともあるので書き記すことにした。ついては先生を尊敬する同志の方々はみだりに本書を他に漏らさないよう、自分（春水）が死んだ後もお取り計らい願いたいと云った事が記されています。つまり本書は一般向けではなく、門人たちの間で回覧することを念頭に記されたようです。序文に記された年は宝暦辛巳、西暦だと一七六一年になります。

次に本書は上巻の本文に移り、己亥正月八日の日付で強斎春水師弟の問答が始まります。最初に春水、昨日白馬の節会（あおうまのせちえ、毎年正月七日に天皇が紫宸殿に出御し、庭に引いた白馬をご覧になり、群臣と宴を催す行事）を拝見し、かたじけなくも天顔（天子様のお顔）を拝したことを報告したのに対して、強斎これを言祝いだ上で次のように述べます。「天照大神より御血脈今に絶

せず統々つがせられ候らへば、実に人間の種にて之無く候。神明を拝せらるる如く思はるるの由、左こそ有る可きことに候。我國の万国に優れて自讃するに勝へたるは此の事に候。余りに有難き物語を承るさへ感慨を催し候。返す返すも尊く覚え候」。しかしその後では「余に天孫綿々として絶えざることを云うとて、今の神道者など云う者が我國は神国じやによつて其の筈じやと云うが是れは愚かなことにて候。丁度愛宕の札をはつて我家は焼けぬはずじやと云うに同じく候。いづくんぞ湯武あらざることを知らんや。其の上神国がそれほどあらたなことならば、何とて今日の如く王室季微になり下らせられ候や・・・我國の自慢と云うは、衰えたりと云えども、幸いに血脈が絶えいで、唐の堯舜の受禪、湯武の放伐の如くなることない云う迄こそあれ、今日では本願寺の勢いほどにもなき王室をいかめしく云うも片腹痛く候。」と述べ、朝廷に対してシユールな現状認識を抱いていたことが伺えます。つまり、強齋先生からすれば、なるほど万世一系の皇統は尊いが、それはただ神道者がするように弥栄を祈るだけでは護れない、事実、徳川の世になって現在の皇室は本願寺ほどの勢力に衰微してしまつたではないかという事でしよう。この点について先生は、「日本の神道と云うものは孔孟の道とちがふて今日に切ならぬ処ある様なものにて候」と述べられています。

(文・折本)

【時論】

今夏歴史教科書 採択に想う 折本龍則

今夏、四年に一度の歴史・公民教科書採択が予定されている。周知の様に、戦後我が国における公教育は、アメリカの占領政策や日教組の影響を強く受け、アジア侵略史観や左翼的な階級闘争史観に基づく徹底的な自虐史観教育が罷り通つてきた。その結果、戦後の我が国は民族の正統史観を否定し、国体の本義を見失うに至つたのである。国体の本義とは詰まる処、「君臣の分」と「内外の別」であり、これを厳格な朱子学的正名論によつて正そうとするのが崎門学である。君臣の分とは、天皇が我が国の主君で国民は臣下ということであり、内外の別とは我が国は天皇の治(しら)す国であり、いかなる中華体制にも属さないということである。

近年では安倍政権が「戦後レジームからの脱却」を掲げ、占領政策の遺産ともいふべき教育基本法を改正した。またこうした政府の動きと相即するように、民間でも「つくる会」を始めとした愛国団体による教科書運動が盛り上がりを見せている。

無論、こうした気運は喜ばしい限りである

が、上述した改正教育基本法も、所詮は国民主権を定めた現行憲法に準拠しており、その国民主権が天皇を主君、国民を臣下となす君臣の分に反しているのみならず、アメリカ由来の民主主義思想を安直に受け容れたものであるから内外の別にも反している。つまり、現行憲法の範疇における改革には自ずから限界があるのである。

同様に、現行の教科書検定制や各自治体による採択制度も、国家が公教育の主体でありながら、歴史認識に伴う価値判断を避け、その責任を本来的に責任能力の無い民間企業や地方自治体、現場の教師に押し付ける無責任体制であり、それこそが「戦後レジーム」に他ならない。しかし愛国的とされる育鵬社や自由社の教科書でさへ、このレジームの下で検定に合格し採択されているのであるから、その愛国にも自ずから限界があるのである。よつて、問題の根本解決の為には、現行の検定・採択制度を見直して国定教科書を復活し、さらには現行憲法を破棄して国体の本義を闡明せねばならないが、当面の現実課題としては、東京書籍の非を説き、地道に国民を啓発していく他ない。そこで、その為の運動の用に供すべく、ずばり『東京書籍の何が問題か』と題した小冊子を作成したので、以下に全文を掲載する。

● ● ●

『東京書籍の何が問題か』

目次

1. 歴史教育の目的とは
2. 神話の喪失
3. 独立国としての歩み
4. 我が国の国柄とは何か(4補)
5. 我が国は侵略国ではない
6. 国家の自存自衛とアジア解放の歩み
7. 大東亜戦争への道

1. 歴史教育の目的とは

教科書の話をする前に、そもそも歴史教育の意義について述べなければなりません。中学の科目では、歴史は社会という科目に内包され、この社会の他に国語、数学、英語、理科の四科目、計五科目があります。よつて、高校受験の事だけを見ると、歴史は全体の一部に過ぎず、更に私立など三科目の高校を受ける生徒にとつては、学ぶ必要すらないという実情があります。しかしこれは飽くまで受験の上での話であつて、公教育の目的における歴史教育の意義は、むしろ他の英語や数学といった科目のそれを上回る位に重要なのです。

というのも、国民の税金を使つてなされる公教育は、はじめ家族の庇護下にある「私民」に国家が教育を付与し、「公民」として

の国民を形成する営みに他ならず、その上で歴史教育は、国民統合の要となる民族の神話や道徳、伝統文化を受け継ぐという極めて重要な役割を果たすからです。よつてもし学校に歴史教育がなければ、国民は私民の集まりとしての烏合の衆に過ぎず、公民にはなれない。公民がなければ、国家が英語や数学などによって、いくら高度な知識や技術を子供達に授けても、それが社会に還元されることはない、つまり敢えて公教育でやる必要などないのです。

この様に、「歴史教育」は日本国民を作るのが目的ですから、それは単純に歴史の真実を知るのが目的の「歴史研究」とは区別されるべきです。もし歴史教育が歴史研究と同じだとしたら、歴史教育は客観的な史実を知ること自体が目的になり、単なる歴史オタクを量産するだけに終わってしまうでしょう。それこそ、そんな事は家でやるべきです。無論、事實は大切ですが、学校が教えるべきなのは、事實そのものというよりも、その事実が歴史の中で持つ意味の方であり、更にはその意味を束ねて体系にした物語です。その物語は、我々の祖先が、壮大な努力によって国家を建国し、様々な内憂外患を乗り越えながら、その独立と繁栄を築き上げてきたという物語です。歴史がこの物語でなければ、子供達の純粋な心に感動を与え、祖国への誇りや自己奉仕の観念を培うことなど不可能です。

ところが、史実を羅列しその意味を教えない

ばかりか、歴史の負の側面を殊更に強調することによって、国民から祖国への誇りを奪い去るような歴史教育などでの外、税金の無駄遣いと言わざるを得ません。

2. 神話の喪失

こうした点を踏まえ、現行の歴史教科書である東京書籍が、『古事記』や『日本書紀』に記された我が国の神話や伝承を、史実としての科学的な実証が難しいとの理由で割愛し、言及していないのは、「歴史研究」ではなく、「歴史教育」の教科書として問題があると考えます。というのも、私たち人類の起源がアフリカの猿人であり、また国民としての起源が大陸からの渡来民であると説明するだけでは、人類学や考古学の知識を増やすことは出来ても、歴史教育の目的である「公民」の育成、すなわち伝統文化による国民の統合には資さないからです。なるほど確かに神話をそのまま「事実」と認めるのは難しい。しかしそのことよりも重要なのは、私たち日本人の

祖先がそうした神話や伝承を信仰し、その信仰に基づいて歴史を織り成してきたという厳然たる「事実」であります。この事実を無視して歴史を単純に唯物的な実証の対象としてのみ捉えようと、かえって歴史の本質を見誤ることにもなりかねません。

この点で、育鵬社と自由社の歴史教科書（前者は『新しい日本の歴史』、後者は『日本人の歴史教科書』）が、我が国の神話をそれぞれ見開き二ページを割いて特筆大書し、民族の神話的由来を説き明かしているのは大変意義深いことです。要点を言いますと、まずイザナギとイザナミという男女の神様が天上の世界である高天原（たかまがはら）から海をかき混ぜて我が国の国土を生み、さらに二人の間に生まれた天照大神（あまてらすおおみかみ）は御孫のニギノミコトに命じて高天原から地上に降り立ち我が国を統治させ給いました。このいわゆる天孫降臨に際して天照大神が我が国の正統な統治者の証としてニギノミコトに授けたのが三種の神器である



我が国の神話を特筆した
育鵬社と自由社

り、それを頂いてニギノミコトが天下つたとされるのが今の九州です。そこから船団を率いて東征し、奈良で初代天皇に即位して都を開いたのがニギノミコの末裔である神武天皇です。以来、今日にいたるまで125代、我が国では一度の革命もなく皇統が連綿と続いて来たのは古今東西に類例を見ない世界的な奇跡と称する他ありません。このように我が国の天皇は天照大神直系の末裔であり、中国の皇帝や西欧の君主のような世俗的な権力者とは一線を画します。事実、歴代の天皇は、日常の政務とは別に、天照大神を奉り国家の安泰と国民の幸福を祈願する祭祀を重要な勤めとして来られました。この神話的事実が分からなければ、なぜ御皇室が尊いのかも分かりませんし、そのご皇室を戴いて国家を営々と築き上げてきた先人たちの思いを理解することは到底不可能です。

先日産経新聞の調査で、2月11日の「建国記念日」を知っている国民が二割未満という衝撃的な事実が明らかになりました。この建国記念日は、上述した初代天皇の神武天皇が初代天皇に即位し都を開いた日に由来しますが、公教育で神話を教わっていない戦後の日本人が、建国記念日を知らないとしても無理はありません。これでどうして我が国の伝統を継承し、祖国への誇りを育てることが出来ましょうか。建国記念日はいわば日本の誕生日です。自分の誕生日や出自を知らない人間が自尊心を形成し、社会的役割を自覚するこ

とが困難のように、戦後我が国におけるナシヨナリズムの喪失が、神話的伝統の喪失に起因することは明白ではないでしょうか。

3. 独立国としての歩み

神話の喪失に加えて、東京書籍に見られるもう一つの大きな問題は、この教科書の内容が無味乾燥な事実の羅列に過ぎず、我が国の先人たちが、ご皇室を戴（いただ）く国家の独立を守るために示した壮大な気概や努力を描いていないために、子供たちに歴史への興味を喚起し、国家に功績のある歴史上の人物への尊敬や、自分もそうした偉大な人物の後に続こうという志を抱かせることが出来ないということにあります。

その一つの例が、聖徳太子の対隋外交に関する記述です。東京書籍では、聖徳太子が中国を統一した隋の進んだ制度や文化を学ぶために小野妹子を派遣し、遣隋使を始めたことと記述していますが、一方で太子が隋の皇帝である煬帝に送った「日出づる処の天子、書を日没する処の天子に致す。恙無きや」という国書の内容にも、その意義にも触れていません。

古来アジア世界では、中国の覇者が「皇帝」として君臨し、周辺の国から朝貢を受ける代わりに、その国の支配者に対して「王」の称号を授与する（冊報という）関係を築いてきました。我が国の支配者もかつては中国に朝貢し、「倭王」の称号を与えられたのでありますが、上述した聖徳太子の国書は、「日出



東アジア朝貢体制を強調する東京書籍

づる処の天子」たる天皇が、「日没する処の天子」たる中国の皇帝と対等であることを示すことによって、有史来初めて我が国が従来朝貢体制とは一線を画する独立国であることを宣言した重要な意義があるのです。しかしながら、東京書籍は、この歴史的事実にも意義にも触れておりません。

そのくせ別の箇所では、「東アジア世界の朝貢体制と琉球王国」と題して見開き二ページを割き、かつての奴国や邪馬台国が中国に朝貢していた事実や室町幕府の將軍足利義満が明の皇帝に朝貢して「日本国王」の称号を与えられ勘合貿易を始めた事実が指摘されています。それどころか、琉球が歴史的に中国の朝貢国であり我が国の薩摩藩が侵攻した後朝貢は続いていた事実にはちゃんと言及しているのです。

東京書籍は、もともと琉球やアイヌといったエスニック・マイノリティーに対しては同情的であり、彼らの独立に向けた戦いには敏感ですが、その一方で肝心の我が国がはやくから東アジアの朝貢体制を脱却して独立を貫

いてきた毅然たる歩みにはいたって鈍感です。これは独立国家の担い手である国民を形成するという公教育における歴史教育の趣旨に対する著しい逆行です。

さらに同様の問題は、我が国と近代朝鮮との関係についても言えます。というのも、歴史的に我が国が中国への朝貢体制と一線を画する独立国であったのと対照的に、朝鮮は中国に朝貢する属国であり、この関係は近代における李氏朝鮮の滅亡まで続きました。そこで我が国は李氏朝鮮末期における独立党の指導者である金玉均を支援し、さらには朝鮮の独立をめぐる日清日露の両戦役を戦ったのです。東京書籍は、我が国の朝鮮に対する植民地支配や同化政策に触れ、日韓併合を断罪

していますが、上述の様に、韓国は併合される以前にそもそも独立国家ではなかったのであり、我が国はむしろ朝鮮の独立を支援したのでした。朝鮮の滅亡は、彼らの独立心なき事大主義が招いた自業自得の結果です。こうした背景事実を踏まえなければ、歴史への公平な評価は不可能ですし、いはんや国家の独立を守るために戦った我が国の先人たちの偉大さを理解することも不可能です。

4. 我が国の国柄とは何か

これまで論じたわが国の神話と対外的独立の歴史に関する記述でいうと、育鵬社と自由社の教科書は共にその要件を満たしているように思われますが、これらの教科書とて万能

ではありません。というのも、上述した我が国の独立の歴史は国家の対外的関係における話ですが、一方の国内における関係、殊に天皇と国民との関係については、育鵬社と自由社の教科書ですら、君臣の大義名分を論じ、我が国柄の固有にして尊厳なる所以（ゆえん）を十分に説き明かしているとはいいいから

です。我が国は、神武天皇の御建国以来、万世一系の天皇を君主に戴いて来ました。この天皇による支配は、皇祖神である天照大神が天孫ニニギノ尊に授けられた「天壤無窮の神勅」に基づくものであり、我が国は君主である天皇と臣下である国民が父子の情愛で結びつき、利害苦楽を共にすることによって、内外の国難を乗り越え国家の安寧秩序を保つことが出来たのでした。しかしながら、長い歴史のなかでは蘇我氏や藤原氏、源平の武門といった時の権力が臣下の分際で専横を振り、また謀反を働く事によって、朝廷から政治の実権が失われることもありましたが、その都度、忠君の志士たちが立ち上がり、神武建国への回帰としての「維新」を成し遂げることによって、天皇を戴く国柄（これを国体とい

います）、を護持してきたのです。したがって我が国の国体においては、天皇親政こそ本来の姿であり、幕府政治はあくまで変態的な姿なのです。この国体の本義が分からなければ、明治維新が王政の復古の大号令で「諸事神武創業の始に基づき」と謳われ

たように、六百年続いた武家政治から、朝廷が政治の実権を取り戻したことを本質的な意義とし、それにより国民が天皇の下で一丸となって西欧列強の侵略から国家の独立を守り得た事実を理解することは出来ません。そしてこうした意義を有する明治維新も一朝一夕に成就せられたものではなく、その過程では、あまたの先知先覚（先覚者）たちによる計り知れない苦勞や犠牲があったのです。だから国家の正史を教える歴史教育では、事に成否にかかわらず、まさにこうした人々の功績を顕彰し、その志を後世に伝えるべきなのです。

例えば、後醍醐天皇が御親政の回復を目指された建武の新政についても、その実現には北条幕府の打倒に功績のあった護良親王や楠木正成、新田義貞と云った忠臣たちの存在がありました。また、三百年続いた徳川幕府も、その基盤が磐石であった四代將軍家綱の頃から、山崎闇斎を始めとする尊王論が起こり、それらは遂に山縣大弐や竹内式部による幕府政治の否定となって現れました。こうした彼らの実績は、幕末の志士たちに強い影響を与え、明治維新の思想的原動力にもなりましたが、東京書籍は言うまでもなく、残念ながら前述した二つの教科書（育鵬社と自由社）もこれらの実績やその意義を十分に説明しているとは言えません。これは看過の出来ない重大な問題です。

（4補）

ここで参考までに戦前の国定教科書ではこの維新前史についてどういった記述がなされているか、以下に昭和「」年文部省発行の国定教科書『高等小学国史』を元に、「尊王論と国学の勃興」と題する小節を全文引用します。

以下引用「」

尊王論と国学の勃興

太平が久しくつゞいて学問がおひおひ進んで来ると、国史・国文の研究が起こり、武家政治のわが国体にそむくことをさとつて、尊王となえるものがあらはれるやうになつた。

そもそもわが大日本帝国は、万世一系の天皇が、大政を御みづからみそなわしたまふのが大法である。しかるに、平安時代の中頃から、藤原氏が権力をほしいまゝにして政治をみだり、遂には、武將が国政を執るような変態が出来た。けれども、幕府の政治は、源頼朝がはじめてから、すでに久しい間にわたつてをり、その根底は極めて堅く、將軍は非常な権力をもつて天下に臨んだ。国民もまた、いつとなくこれになれて、少しも疑をもたないばかりか、中には、たゞ將軍のあるのを知つて、皇室の尊嚴にましますわけを知らないものが少なくなかつた。



戦前の中学生向け国定教科書

外戚となつて幕府の基を固めようとし、秀忠の女東福門院を第百八代後水尾天皇の中宮として宮中に入れたてまつた。さうして、程なく、中宮の御腹の皇女で、御位にお即きになつたのが、明正天皇であらせられ、奈良時代から久しく絶えてゐた女帝の例がまた開かれた。第百十代後光明天皇は、幕府をおさへて大いに皇威を張らうとなさつたが、せつかくの御志もまだ果したまはぬうちに、御葬礼でおかくれになつたから、幕府は、もはや少しも憚るところがなくなつた。

水戸の藩主徳川光圀は、尊王の志が深く、四方から学者を集めて、江戸の別邸に史局を開き、大日本史を編纂して、大義名分を明らかにし、山崎闇斎も京都にあつて尊王の大義を説き、神道をとなへて、盛に弟子を養成した。これから、国民は、わが国体の尊いわけをさとつて、幕府の朝廷に対したてまつるわがまゝな振舞を憤るものが、おひおひにあらはれて来た。闇斎の学説を奉ずるものに、竹内式部・山縣大弐などがあつた。式部は、越後の人で第百十六代桃園天皇の御代に、公卿の間に出入し、大いに武家政治の非を論じて、王政の古にかへらればならぬことをとなへ、遂には、その説が天聴にまで達したが、やがて、幕府にいまれて追放せられた。大弐は、甲斐の人で、日頃、皇室の衰へさせられたのをたいそうなげき、江戸にあつて、きびしく幕府を攻撃したから、遂に幕府の為に斬られた。

かやうに、真先に尊王の大義をとなへ、幕府の不義を論じたものは、忽ち罪せられたが、尊王の思想は、たいいおさへされるものでなく、かへつて国学の興るにつれて、ますますひろまつていつた。さきに、光圀が国史の研究をはじめた頃、大阪に僧契沖があつた。博学で、わが古語にくはしく、光圀のたのみで万葉集の註釈をあらはした。これから国学の研究がしだいに盛になり、寛政の頃、伊勢の本居宣長によつて大成せられた。宣長は、賀茂真淵の門人で、深く古史・古文を研究し、古事記伝をはじめ、数多の書物をあらはして、国体を明らかにすることにつとめた。その学を受けたものは、全国にわたつてすこぶる多かつたが、中でも、平田篤胤は、最も名高く、儒・仏をしりぞけて神道をとなへ、盛に尊王愛国の精神を鼓吹した。かつて、

人はよしからにつくとも我が杖はやまと島根にたてんとぞ思ふ。

とよんで、その堅い信念を示したのであつた。また宣長と同じ時代に塙保己一があつた。盲人ながらも博聞強記で幕府の保護を受けて江戸に和学講談所を設け、広く古書を集めて群書類従一千八百冊余りを出版した。それで国学研究の便宜が開けていつた。

かうして、古史・古文の研究がいよいよ盛になつたから、世人はますますわが国体の尊厳であることを知り、大義名分をゆるがせにしてはならぬことをさとするやうになり、尊王家がつぎつぎにあらはれた。寛政の頃、高山

彦九郎・蒲生君平の二人は、皇威が久しく衰へさせられたのをなげいて、あまねく諸国を廻つて熱心に尊王の論をとなえた。ついで、頼山陽が出て、二十年余りの間苦心を重ねて日本外史をあらはし、武家興亡の歴史を説いて、政権が武家に移つた由来を論じ、また晩年には病苦に悩みながらも、これをしのんで日本政記を作り、順逆の別を明らかにして尊王の精神を鼓吹した。これらの書物は、いづれも痛快な文章で綴られて、広く世人に愛読せられたから、国史の知識を普及すると共に、人心に非常な感動を与えた。後に王政復古が成就したのは、実にこれらの人々の苦心に基づくところが多かつたのである。

二 引用終

5. 我が国は侵略国ではない

幕末・明治以降における我が国の近代史は苦難の道のりでありました。西欧列強のアジア侵略は19世紀後半から本格化し、その矛先は我が国にも向けられていたのです。前にも述べましたように、当時の朝鮮は清国の属国でありましたが、一八四〇年のアヘン戦争で清国が負けたのを機に、列強は瀕死の老大国と化した清国への侵略を加速し、またシベリアでの極東開発を進めるロシアも南下政策に乗り出し、清国衰退に乗じて満州と朝鮮に侵略の触手を伸ばし始めました。そこで、我が国はロシアとの直接対峙を避けるために朝鮮の独立を必要とし、またそのために朝鮮にお

ける独立開化派の領袖であつた金玉均達を支援しました。金玉均は、我が国の明治維新を模範とした朝鮮の内政改革を志し、クーデターを敢行しましたが、清国の庇護をたのみにする守旧派の反動によつて失脚し、我が国に亡命しました。亡命中の金玉均を献身的に支援したのは、福沢諭吉や頭山滿といった民間の有志たちです。彼らは日中韓の三国が独立と連帯によつて西欧列強の脅威に対抗する考えを抱いていましたが、福沢は金玉均の暗殺を機に朝鮮の改革に絶望し、脱亜論に転じました。朝鮮をめぐる日清の対立は、日清戦争に発展し、これに勝利した我が国は清国の朝鮮に対する宗主権を排除し、朝鮮を我が国の指導によつて独立国にしようとしています。しかしその後、三国干渉で我が国が露独仏に屈すると、朝鮮は我が国を軽侮し、今度は満州を侵略を続けるロシアを宗主国に仰いで我が国を牽制するに至りました。かくして満州と朝鮮をめぐる日露間の争いは日露戦争に発展し、我が国は多大の犠牲を伴いながらも辛うじて大国ロシアに勝利したのでした。

このように、近代以降の我が国は、西欧列強によるアジア侵略が全盛の時代のなかで自存自衛を確保することに必死だったのである。またそのために清国やロシアに従属する朝鮮を侵略したのではなく、むしろその独立を促したのでした。しかしながら東京書籍は上述したような清国の衰退やロシアの南下といった環境要因を説明していないために、あ

たかも我が国が西欧列強に追従してアジアに領土的野心を抱き、故なくこれを侵略したかのような印象を与える記述になっています。例えば日清戦争を記述したページには、侍姿の日本人と胡服を着た中国人が魚となった朝鮮を釣ろうとし、橋の真ん中でロシアが漁夫の利を伺うビゴアの有名な風刺画が載っていますが、歴史の真相は、ロシアと清国が朝鮮を属国にしようとしていたのに対して、我が国の立場は朝鮮の完全な独立にあつたのですから、この挿絵は我が国を侵略的な西欧列強と同等に置くミスリーディングなものです。

6. 国家の自存自衛とアジア解放の歩み

たしかに明治維新以来の我が国政府は、殖産興業、富国強兵政策による国家の近代化を推し進めて欧化路線を突き進み、日英同盟の下に、自らも列強の一翼となつて、満蒙や中国の一部で権益を獲得したのは事実です。しかしその一方で、日露戦争における我が国の勝利は、有色人種の白色人種に対する勝利と



ビゴの有名な風刺画

して、西欧列強の植民地支配に苦しむアジアの諸民族に独立への希望を与え、その後、我が国に亡命してきたアジア独立運動の志士たちを玄洋社の頭山満を始めとする民間の有志たちは献身的に支援しました。我が国を盟主としたアジアの独立を志向するこの「大アジア主義」と呼ばれる思想と運動は、最終的に、欧米による植民地支配からのアジアの解放という大東亜戦争の大義に結実し、この戦争の結果、我が国は敗れましたが、アジア諸国は独立の悲願を達成し、今日における隆盛の基を築きました。我が国が自国の独立のみならずアジアの独立に果たしたこの世界的な事実を目を伏せ、日本近代史のもう一つの重要な側面を見落としては、歴史認識の公正を欠くのは勿論、自国への誇りと愛着を養い、健全な国民を育成するという歴史教育の趣旨にも反することになります。その点、育鵬社の教科書で我が国がヴェルサイユ会議で「人種平等案」を提議し、また大東亜戦争中に我が国がインド国民軍と共に戦い、昭和18年には



大アジア主義を掲げた
玄洋社の志士たち

アジア各国の代表者を東京に集めて大東亜宣言を採択したことなどの事実が公正に記述されているのは、評価に値します。

7.大東亜戦争への道

大東亜戦争に至る我が国の歴史は、東京書籍が依拠するようなアジア侵略史観によって評価しうるほど単純ではなく、19世紀末に門戸開放主義を掲げ、太平洋に乗り出したアメリカと、満蒙（満州と蒙古）に特殊権益を有する我が国の抗争、そしてロシア革命以降は、満蒙における国際共産主義の防圧といった要因が複雑に作用するなかで展開しました。

すなわち、南北戦争による国家分断の危機を乗り越えたアメリカは、彼らの言う「明白な使命」によって西部開拓を進めました。その実体は白人達の思いがった宗教的偏見による先住民の虐殺に他なりません。その後、開拓のフロンティアが西海岸に到達すると、次にアメリカは太平洋に進出してアジア大陸を目指しました。しかし既に中国は西欧列強の勢力圏で仕切られていたため、中国の「門戸開放、領土保全、機会均等」といった普遍的理念を唱導することによって、大陸権益への参入を図ったのです。このようにアメリカの普遍主義は自国の国益を正当化する方便に過ぎませんでした。そんな中、アメリカ大統領のセオドア・ルーズベルトは満州侵略を企むロシアを牽制する為に我が国を援助しましたが、我が国政府が南満州鉄道の

日米共同経営を約するハリマン覚書を破棄したのを機に、今度は我が国を大陸進出の障害と見做すようになりました。日米対立の起源はここに発し、以後アメリカはワシントン会議における四ヶ国条約によって日英同盟を終了させ、中国政策では蒋介石を支援することによって我が国を国際的孤立に追いやりました。アメリカの対日非難は常に普遍的人道の名によって行われましたが、広大な国土と潤沢な資源を擁するアメリカと異なり、我が国は国土狭小、資源貧弱な割に人口寡多であり、満蒙権益は国家の生命線とも言える特殊権益でありました。特に、世界恐慌以降、世界経済が「持てる国」を中心にブロック化することであって、満蒙権益は「持たざる国」である我が国にとって死活的に重要となったのです。しかるに当時の満州は、張作霖による軍閥支配の下で虐政が敷かれ、張作霖死後はその子の張学良が第一次国共合作下の国民党に帰順したことによって満州の赤化が進行し、反日暴動が激化しました。満州事変はこうした状況下で勃発したのであり、それは塘沽停戦協定で一応の決着を見ましたが、その後もシナ共産分子による対日挑発は止まず、遂に盧溝橋事件による支那事変の勃発となったのは日中両国の悲劇という他ありません。このシナ事変に際してアメリカは終始蒋介石を支援し、我が国は援蒋ルートを遮断するために北部仏印に進駐しましたが、アメリカはその報復措置として我が国に屑鉄の禁輸などを含

む経済制裁を発動し、翌年の南部仏印進駐には石油禁輸を以って対抗しました。かくして日米対立は決定的となり、我が国は窮鼠猫を囓むごとくしてアメリカに戦端を開いたのである。

以上概観したように、大東亜戦争は、満州をめぐる日米争霸戦の必然的帰結でありましたが、我が国にとって満州が国家存立に不可欠な特殊権益だったのに対して、自給自足が可能なアメリカにとっては帝国主義的な野心の対象に過ぎませんでした。そうした意味で、本当の侵略国は我が国よりもアメリカの方であり、そのアメリカが作った東京裁判史観によって我が国が過去を断罪されるいわれは微塵もありません。

古今東西を通じて、国際政治で法や人道といった如何なる理想が謳われようと、その実体は凄惨苛烈な権力闘争を覆い隠す美辞麗句に過ぎません。我が国が今日あるのは、現行憲法が謳うような「諸国民の公正と信義」を信じたからではなく、我が民族の祖先が天皇を戴いて内外の国難に勝利したが故です。明治以降、大東亜戦争に至る我が国の歴史もまた、国家の自存自衛を全うするための先人たちの苦悩の歴史なのであり、だからこそ今日を生きる我々もそうした先人たちを偉大な祖先として素直に感謝し、祖国を守る責任を次世代の国民に引き継いで行かねばなりません。歴史教育はそのためにあるのです。